

不登校児童生徒の社会的自立に向けた支援の工夫

～アセスメントに基づいた生徒指導の3つのポイントを生かした支援を通して～

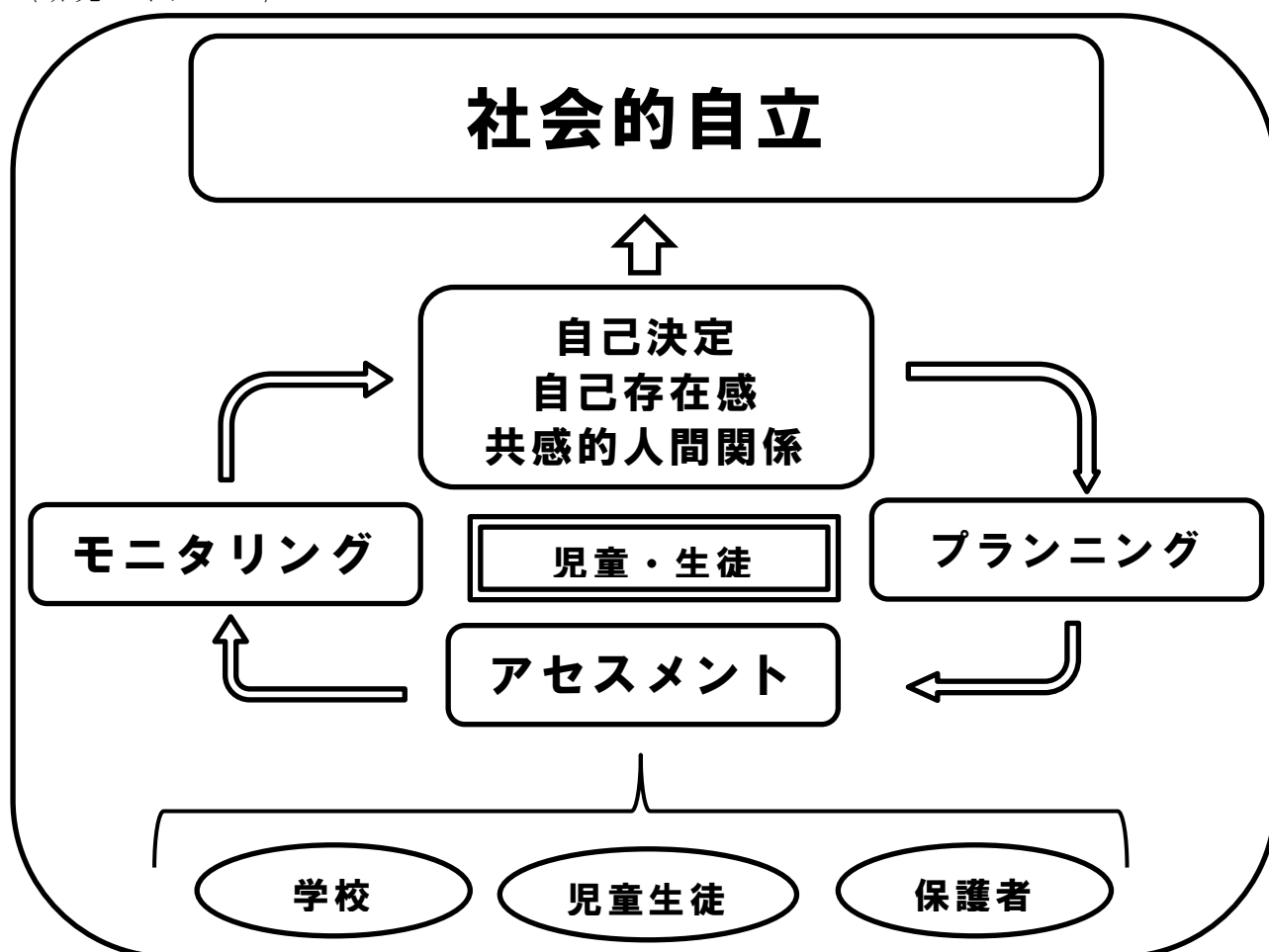
那覇市立上山中学校教諭 一安 裕次郎

〈研究の概要〉

児童生徒の状態やどのような支援を必要としているのか、学校や保護者、児童生徒本人から情報を集めて、多様で複雑な不登校の要因や背景を的確に把握し、児童生徒が不登校に至った状況を理解し、アセスメントを丁寧に行い、生徒指導の3つのポイントを意識して支援を行うことにより、社会的自立に向けて効果的な支援に繋げる工夫を行った。

受容や傾聴、共感的理解などを重点に置き、生徒指導の3つのポイントを意識して支援を行い、児童生徒の自己指導能力と自己肯定感を高め、大人との信頼関係を構築していく過程で、社会性や人間性の伸長につながり、それが結果として社会的自立に向けての一歩を踏み出すことができた。

〈研究のイメージ〉



目 次

I	テーマ設定の理由	90
II	研究目標	90
III	研究構図	91
IV	研究内容	91
1	アセスメントについて	
(1)	アセスメントの方法	
(2)	アセスメントシートの活用：アセスメントツールとして	
(3)	アセスメントの視点	
(4)	得た情報からの読み取り	
2	生徒指導の3つのポイントを生かした支援について	
(1)	児童生徒の自己決定	
(2)	児童生徒の自己存在感	
(3)	共感的な人間関係の育成	
V	研究実践	93
1	アセスメント（学校生活、家庭生活、対人関係、本人の特性についての情報収集）	
(1)	学校調整（アセスメントシートの活用、学校支援計画の共通理解）	
(2)	インテーク（受理面接）の実施	
(3)	支援目標の設定	
(4)	支援報告	
(5)	会議の持ち方	
(6)	きら星カンファレンス	
2	生徒指導の3つのポイントを生かした支援の工夫	
(1)	初回支援	
(2)	支援内容	
(3)	終結後のつなぎ	
	ケース 中学生男子（遊び非行系不登校）	
VI	実践を通しての考察	96
VII	成果と課題	96
1	成果	
2	課題	
	〈主な参考文献・引用文献〉	

不登校児童生徒の社会的自立に向けた支援の工夫

～アセスメントに基づいた生徒指導の3つのポイントを生かした支援を通して～

那覇市立上山中学校教諭 一安 裕次郎

I テーマ設定の理由

文部科学省の調査によると、小・中学校の不登校児童生徒数は、平成30年度には約16万4千人に上っており、過去最多を更新し続けている。不登校は「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校したくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的な理由によるものを除く）」と定義されていて、「年々不登校が増加し続けている現状にあって、豊かな人間性や社会性、生涯学習を支える学力を身につけるなど、すべての児童生徒がそれぞれ自己実現を図り、また、社会の一員として必要な資質・能力の育成を図るという義務教育制度の趣旨から、不登校に関する取組の改善を図ることは、喫緊の課題であって、早急に具体的な対応策を講じ、実行する必要がある」とされている。

本県の小中学校不登校児童生徒数の現状は、平成30年度1000人当たりの割合が、小学校で全国平均7.0人に対して10.9人となり全国ワースト1で、中学校では全国平均36.5人に対して41.9人となり全国ワースト3となっている。その対策としては学校では授業改善や開発的・予防的生徒指導の徹底、教室に入れない児童生徒の居場所づくりなどを行い、関係機関では学校や家庭と連携を図り、不登校の児童生徒に対する早期の支援を図るための体制づくりが求められている。

平成28年7月不登校に関する調査研究協力者会議から出された、不登校児童生徒への支援に関する最終報告の中では「不登校児童生徒への支援の目標は、児童生徒が将来的に精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるよう、その社会的自立に向けて支援することである。その意味において、不登校児童生徒への支援は、学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指すことが必要である」とされている。

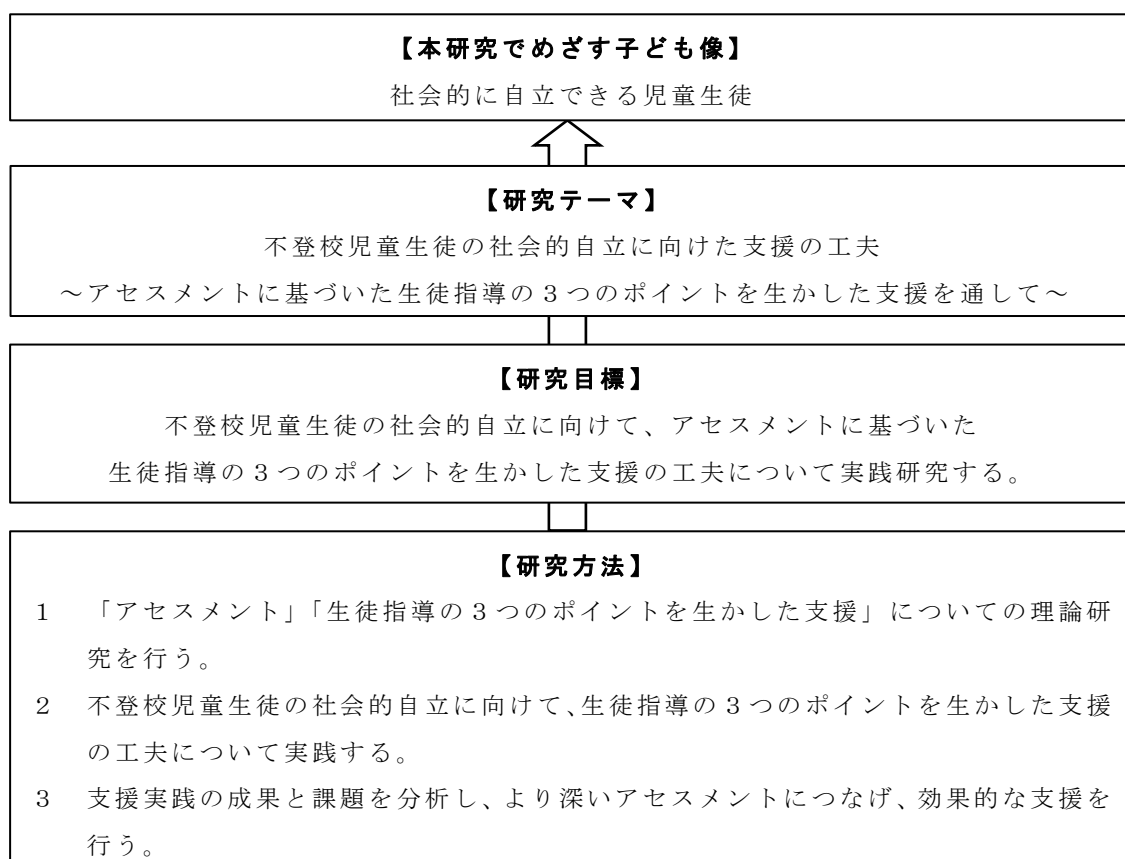
そこで本研究では不登校児童生徒の状態やどのような援助を必要としているのか、学校や保護者、児童生徒本人から情報を集めてアセスメントを行い、学校や保護者と連携を図りながら児童生徒に寄り添い、生徒指導の3つのポイントを意識して支援を行うことによって児童生徒の自己肯定感を高めるためにも重要である。不登校児童生徒にとっても、支援してくれる周りの大人との信頼関係を構築していく過程が社会性や人間性の伸長につながり、社会的自立につながると考えられる。

社会的に自立できる児童生徒の育成を目標としてこのテーマを設定した。

II 研究目標

アセスメントに基づいて生徒指導の3つのポイントを生かした支援を行い、不登校児童生徒の社会的自立に向けての支援の工夫について実践研究する。

Ⅲ 研究構図



Ⅳ 研究内容

1 アセスメントについて

(1) アセスメントの方法

効果的な支援を行うためには、児童生徒のニーズや実態を把握し、多面的な情報収集が必要である。学校職員（管理職、生徒指導主事、児童生徒と関係する職員）との学校調整会議、保護者・本人と心理士も交えてのインタビュー、支援の中での会話や観察から得た情報などをアセスメントシートにまとめていく。

(2) アセスメントシートの活用

支援が必要な児童生徒が抱える課題には学校生活、家庭生活、友人関係など様々な要因・背景があり、学校や教育関係機関のみならず、場合によっては福祉、医療等の関係機関とも連携して支援を行うことが必要である。

そこでアセスメントシートを活用して、収集した情報を整理していく事で児童生徒の困っている状況や必要な支援を割り出し、学校や関係機関で共通理解を図る事で、多角的な視野に立った支援体制を構築することが可能となる。

(3) アセスメントの視点

① 児童生徒自身の情報

学習面、心理面、健康面、発達面、進路面など

②家庭の情報

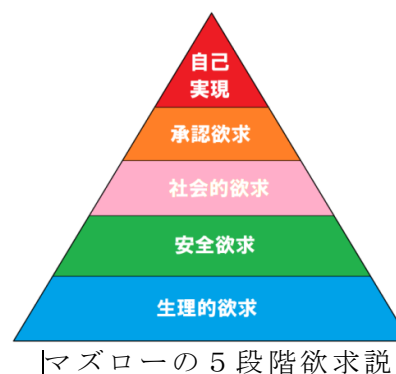
保護者の状況、生活困窮、虐待、親・兄弟との関係など

③人間関係の情報

学校内外の友人関係、先輩後輩との関係、教師との関係など
上記の視点を持ちながら支援を行っていく。

(4) 得た情報からの読み取り

学校調整やインテークした情報を元に
きら星学級担任ときら星担当心理士、児童
生徒担当支援員がマズローの5段階欲求を
参考にどの段階の欲求が満たされていない
のか確認して、支援目標を立ててどのよう
な活動や支援が必要なのか検討していく。



2 生徒指導の3つのポイントを生かした支援について

生徒指導提要では、「生徒指導は一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指すものである。」とされており、本学級では、生徒指導の3つのポイントを意識した支援を行い、自己指導能力の育成や自己肯定感を上げていくことで社会性や人間性の伸長につながり社会的自立に繋がっていけるような支援の工夫を行っていく。

中島によると、自己肯定感には自分には価値があると思える「自尊感情」、ありのままの自分を認める「自己受容感」、自分にはできるとも思える「自己効力感」、自分を信じられる「自己信頼感」、自分で決定できる「自己決定感」、自分は何かに役に立っているという「自己有用感」の6つから構成されているとしている。

生徒指導の3つのポイントを意識しながら、支援の中で自己肯定感を構成する6つの感情を高揚させることを意識しながら取り組むことにより、自己肯定感や自己指導能力を高め、社会的自立に向かうことができるようになると思われる。

(1) 児童生徒の自己決定

- ・児童生徒自ら考え判断して決定していけるような支援の工夫。
(自己決定感、自己信頼感)
- ・児童生徒が興味・関心を持ち、主体的に活動できる支援の工夫。
(自己決定感、自己効力感)
- ・自分だけでなく相手の事も考えながら決定していける工夫
(自己有用感)

(2) 児童生徒の自己存在感

- ・児童生徒に自分が価値ある存在であると実感できる場を与える工夫。
(安全欲求)(自尊感情)

- ・活動を通して承認や称賛の場を与える工夫。

(社会・承認欲求)(自尊感情・自己有用感)

- ・児童生徒の話を否定することなく傾聴する。

(安全)(自尊感情、自己受容感、自己信頼感)

(3) 共感的な人間関係の育成

- ・個別対応で良い関係づくりを行い。互いに認め合い、安心して活動できる場の提供を行う。

(生理的・安全欲求)(自己受容感、自己信頼感)

- ・良い行いや頑張っている姿は褒め、好ましくない行動については正していけるよう話をしていく。

(社会欲求)(自尊感情、自己受容感)

- ・活動の中で学校職員とともに活動する場を設定していく。

(社会・承認欲求)(自尊感情、自己有用感)

V 研究実践

1 アセスメント(学校生活、家庭生活、対人関係、本人の特性についての情報収集)

(1) 学校調整会議(アセスメントシートの活用、学校支援計画の共通理解)

学校側からは管理職、生徒指導主事、学年主任または担任、その児童生徒をよく知る職員、きら星学級からは担当指導主事、担任、担当支援員が参加して行う。会議の内容は家庭状況(家族構成、児童生徒の家での様子、母親・父親・兄弟・その他について)、学校生活(学習面・生活面・友人関係・これまでの支援の経過)について確認をする。また、学校には児童生徒に関する学校支援計画を作成してもらい、学校の支援目標(長期・短期)、担任・保護者・本人のニーズ、児童生徒の学習面・行動面・対人関係・生活面の良い面、要改善点、具体的支援の方法の確認をする。信頼関係がとれている学校職員や家族、現在関わっている諸関係機関などの状況の聞き取りを行う。それらの情報をアセスメントシートに整理して、効果的なプランニングに活用する。学校での調整会議をすることで、足並みをそろえて同じ考えで連携を図りながら支援を行う。

(2) インテーク(受理面接)の実施

支援をスタートするに当たって保護者・本人と心理士ときら星担任がインテークを行い、今の状態(身体症状など)、思い当たる原因、病気や発達遅れの有無、家庭での様子(性格、両親・家族との関係、祖父母との関係など)、学校での様子(出席状況、交友関係、教師との関係、成績、部活動など)や本人、保護者のニーズなどの聞き取り、効果的なプランニングに活かす。また、相談を聞くことで保護者・本人との信頼関係を深める。

(3) 支援目標の設定

学校や保護者から得た情報を元に、支援の指針を持つために目標を設定する。すぐに目標を設定するのではなく、数回の支援を通して児童生徒からニーズ(困り感)を引き出し、児童生徒の困り感に対して支援の中で、こういった働きかけが出来るのかを考えてから目標をたてる。目標達成が難しそうであればその都度修正を行う。

児童生徒に対する見立てが、ずれていたと思われる場合も目標を修正しながら、より良い支援を行う。

(4) 支援報告

学校調整やインテーク情報の中だけでは得られない情報や学校から聞き取った情報と保護者から聞いた話に相違がある場合があるので、タイミングを見計らって、活動の中で児童生徒から聞き取り、より正確なアセスメントにつなげることにより、児童生徒理解を深め効果的な支援に繋げる。

(5) 会議の持ち方

児童生徒が不登校になった理由（原因）を、心理士、指導主事からのアドバイスを参考に見立て、今後の効果的な支援について考察し、これまでの支援の成果と課題を分析する。

(6) きら星カンファレンス

児童生徒の状態の変化や、新しい課題や問題点がないか、適切な支援ができているかなどを複数の視点で検討する。また、支援の中で困っている事などを、支援員同士で情報交換することで、より生徒に寄り添った支援を行う。

2 生徒指導の3つのポイントを生かした支援の工夫

(1) 初回支援

初回支援では、きら星担任と一緒にアウトリーチ（迎え）を行い、保護者・児童生徒と支援員の顔合わせ、家の場所確認と駐車場所確認、その後庁舎へ戻る車の中でも、スムーズに支援スタートできるように支援員との関係づくりを行う。警戒心の強い児童生徒は、学校に依頼してきら星学級まで連れてきてもらうこともある。

初回面談では、「きら星学級で頑張りたい事」、「これから行う支援の一つ一つが職業と繋がっていて、将来の職業を選択する際のヒントにして欲しい事」、「きら星学級目標」の確認をして、社会的自立に向けての動機付けを行う。

支援員は初回支援を行うにあたり児童生徒の家庭環境、家族構成、現状、相談に至る経緯、本人と保護者の思い（ニーズ）、学習面等、学校の見立ての確認を行い、しっかり児童生徒の背景を捉えて支援に備える。

(2) 支援内容

支援で意識した事は、笑顔で生徒に合わせた柔らかい言葉使い、自己決定・選択出来るような声かけ、指導的にならないように気をつけ、探りすぎないようにする。児童生徒の外見に気を取られず、児童生徒自身を受容して、傾聴していく事でスムーズに信頼関係づくりを行うことができた。

学校職員と一緒に活動する場を設け、学校職員との信頼関係づくりや褒める場の設定し、学校の一員であるという再確認などを行う。支援員や学校職員と少しずつ関係が取れてきた児童生徒には、学校での支援を促していく。校内で、個別で活動できる部屋を設置し、そこで校長先生や学級担任、学年職員などに参加してもらい関係づくりを行う事で、スムーズな学校復帰に繋げていく。

（３）終結後のつなぎ

今年度は支援を通級期間だけで終わるのではなく、気になる生徒に関してはアフターきら星という形で、月に１回程度活動の場を設ける。その支援の中で登校状況や家庭での状況、現在の困っていることなど話し相手になりアドバイスをを行う。支援終了後も継続して見守っていく事で、社会的自立に向けての再確認を行う。

また、学校復帰を望まない児童生徒に関しては、声かけを続けながら教育相談課内の適応指導教室や学習支援室に繋いでいくことにより、切れ目のない支援を行う。継続して児童生徒の社会的自立に向けてのサポートをしていく。

ケース 中学生男子（遊び非行系不登校）

【アセスメント①：学校・保護者から情報収集】

- ・一つ目の見立てとして本人の発達に課題があり、登校してきた時は先生方に反抗し胸ぐらを掴んだり、物を壊したりする。一人になると落ち着いて話もできるが、誰かいると話できない。落ち着いている時は作業などの活動はできる。
- ・二つ目の見立てとして、保護者との関係は悪くない。学校で話ができる職員は生徒指導主事だけ。ほかの職員には「俺だけ注意するからむかつく」と教師の対応に不満を持っている。

【プランニング①】

- ・まずは本人の困り感を聞き出していく。
- ・安定した通級を目指して本人の興味がある活動を行っていき、信頼関係づくりに努める。

【モニタリング①】

- ・本学級に関しては意欲関心が高まってきて、支援員に学校に対しての不満などいろいろ話してくれるようになる。
- ・本人の活動意欲は高く、ほとんど欠席することなく通級することができた。しかし、学校の先生方に対する態度は変わらない。本人なりには学校に関しては、自分自身が迷惑をかけたから、学校には居場所がないという事を話していた。学校との情報共有や連携を密にする。

【アセスメント②：学校、保護者、担当支援員から情報収集】

- ・担当支援員との信頼関係が構築され、本人が問題行動に関する話などをしてくれるようになる。
- ・高校入試も頑張るけど、それよりも仕事を頑張りたいと話す。
- ・本人の話から、バイクに乗っているようなニュアンスの話もあり、安全面の注意も必要である。

【プランニング②】

- ・本学級で本人と学校職員との交流を持ったり、調理で作った料理を学校へ持っていったりして信頼関係づくりをサポートしていく。
- ・卒業後は就職も視野に入れているので、職場体験や見学などを支援の中に入れていく。
- ・安全面の話を学校とも共通確認し、さらなる情報収集と連携強化を図る。

【モニタリング②】

- ・伊江島自然体験などを通して、職員と関係づくりを行い無事卒業式に参加する。式中や式後の問題行動にも関わることはなかった。
- ・高校入試は不合格だったが、4月からは親戚の所で仕事をして、18歳になったら東村の青年開発隊に建築関係の免許を取りに行くという話をする。

VI 実践を通しての考察

本研究において最も重要であったのは、アセスメントである。児童生徒の状態やどのような支援を必要としているのか、学校や保護者、児童生徒本人から情報を集めて、多様で複雑な不登校の要因や背景を的確に把握し、児童生徒が不登校に至った状況を理解し、アセスメントすることにより、効果的な支援に繋げることができた。

きら星学級に通級する児童生徒は、個性が強かったり家庭環境に恵まれない等で、粗暴な行動をとる児童生徒や傷つき体験のある児童生徒が多数繋がってくる。非行行為や登校できない事などを責められ、傷ついて自己肯定感が低い児童生徒が多い。きら星学級に繋がり、受容や傾聴、共感的理解などを重点に置き、支援を重ねていく中で、信頼関係を構築することができた。心では「信じてほしい」「相手にしてほしい」「向き合っていてほしい」と思っているが、素直に表現できない。児童生徒に寄り添った支援の中で、気持ちを汲み取って学校と連携を図る事で多くの児童生徒の登校に繋げることができた。

私自身、生徒指導主事の時は外見から子どもを判断することが多かった。きら星学級にきてその生徒自身の外見や身なりではなく、内面に目を向けた時に生徒自身の良い面が多く見えてきた。その良さを理解しながら支援を行うことで、自己肯定感が高まり、児童生徒に変容が見えた。その変容に気づいたタイミングを逃さずに対応していくことによって、児童生徒がスムーズに次のステップへ移ることができた。タイミングを逃さないために、支援後の支援員との情報共有を密に行うことで、児童生徒の行動や言動から小さな変化を見逃さずに対応することができた。

今まで入学式の体育館までしか行けなかった生徒が、所属学級で一定の時間を過ごすことができた。次の支援はきら星の支援を校内で活動する事を希望していたが、休校処置で叶わなかった。生徒にとっては、きら星学級での小さな成功体験の積み重ねが、大きな一歩を踏み出すきっかけになったと考えられる。

きら星学級の活動を通して、自らの将来設計を行い、大人との信頼関係の構築や自己肯定感の向上、自己指導能力の育成が社会性や人間性の伸長に繋がり、それが結果として社会的自立に向けての一歩を踏み出すことができた。

VII 成果と課題

1 成果

- (1) アセスメントを丁寧に行い、マズローの5段階欲求説を意識し支援を行うことで、効果的な手立てを講じることができ、登校復帰や他機関への繋がりなど、社会的自立を促すことができた。
- (2) 生徒指導の3つのポイントをいかした支援の工夫を行う事で、自己肯定感や自己指導能力が高まった。登校復帰や適応指導教室や学習支援室に繋がったりし

て、次のステップに移ることができ、社会性や人間性の伸長につながり社会的自立を促すことができた。

2 課題

- (1) 一時支援の場合、学校の情報だけでは限界があるので、家庭支援も視野に入れた子ども寄添支援員を活用してのアセスメントの工夫
- (2) 長期的に支援が必要な児童生徒の居場所となる関係機関とのネットワークの構築

〈主な参考文献・引用文献〉

『不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）』 文部科学省 令和元年 10 月 25 日

『不登校児童生徒への支援に関する最終報告』

～一人一人の多様な課題に対応した切れ目のない組織的な支援の推進～

不登校に関する調査研究協力者会議 H28 年 7 月

『生徒指導提要』 文部科学省 H22 年 3 月

『チームで取り組む生徒指導・創育相談』 石川美智子 ナカニシヤ出版 2018